

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では極めて小さいが、しかし地道な貢献について紹介したい。チェンマイ大学に客員教授として招聘を受けながら既に9年目を迎えることは既述した。こちらに招かれて間もない時にチェンマイ大学工学部が主導する国際シンポジウムがラオスのルアン・プラバン (Luangprabang) で開催され、「貴方も行って発表しなさい」との誘いを受けた。それ以前にもラオスには家族を連れて観光には行ったがそれきりであり、その時もビエンチャンを中心とした観光地、主として寺や川登りであった。しかしその私的訪問でも半日は国立ラオス大学 (National University of Laos) を訪れ2時間の講義を申し出、終わりには家族も交えて昼食会を持った。これ以前にも3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムにチェンマイ大学が招聘したラオス大学からの知人を辿って一度訪問したことはあった。この時の訪問でも日本の大学の紹介を含めた2時間のセミナーを消化した。首都ビエンチャンから飛行機でほぼ1時間ほど離れたルアン・プラバンは古く歴史のある街である。その後も3～4度程訪れる機会を頂いたし、またこの地に新しくできたスパナボン大学 (Souphanouvong University) からタイ政府の発電事業機構 (EGAT, Electric Generation Authority of Thailand) の奨学支援のもとで修士課程に学ぶ学生の受け入れも行われてきた。タイに比して未だその発展の度合には差はあるが、国の将来を背負う人材育成を担った大学の一つである。筆者の記憶ではその時のタイの大学の総数は約150余 (今では2年制の短大クラスや職業専門学校も4年制大学に格上げしようとする動きにあり、ラオスではその数はわずか15校ほどと理解していた。ASEAN 経済共同体の設立に鑑み、軒並みにアジアの大学は教育の重要性を認識し人在育成に力を入れつつある、と筆者は認識している。ラオスの言葉とタイのそれはアルファベットでは殆ど同じであるが、書いた文字ではいくらか意味が異なるものの双方が互いに自国語を話してもほぼコミュニケーションが出来るようである。スパナボン大学の工学部長の経歴が面白い。タイのカセサート大学で修士を終えたのでタイ語は出来る。もちろん母国語であるラオス語は当然であるが、ロシアにも留学の機会があってロシア語もできると言う。彼はその後チェンマイ大学に2～3回訪れたがその後疎遠になっている。

先日、日本の研究助成支援機関にチェンマイ大学が代表となって共同研究計画を申請するという事で、タイをはじめラオス、シンガポール、ベトナムの4ヶ国から関係の代表者が集まり各自が持ち寄ったアイデアをプレゼンにて紹介した。筆者も出て欲しいとの要請を受けて出席したが、ラオスからの参加者は見るからに若い研究者であった。初めての事なので名刺を交換し、旧知の工学部長がどうしているか近況を尋ねた。会議を含めて2日 (正味1日半) であったが、後半になってその研究者が筆者の宿泊施設について尋ねてきたので気軽に応答していた。ところが彼の口から次のような話が出て驚きであった。「実は自分もチェンマイ大学の工学部の電気工

学科で修士課程を修了したが、あなたと同じ宿舎に滞在していた。国に戻ってから結婚し、いまは1男1女の身である。その時から8年にもなるが、貴方がいる同じ宿舎に滞在中に貴方からバナナを頂いたことをはっきりと記憶している」と言う。時の経過とともに環境も自分も、また相手も変わるので気が付かなかったが、彼の成長ぶりにあらためて驚きを隠せなかった。急に昔が懐かしくなり「なるほど、そんなこともあったか」と自分自身で頷き時の経過の速さを思い知った。他にも数名の留学生がこのスバナボン大学からは毎年来て修士を終えて帰国したことを覚えている。また彼らのいくらかには、その後筆者がその大学を訪れた時に顔を合わせ再会を喜んだが、思わぬ病魔に襲われ手術をし、いくらか痩せた風貌になっていたかつての留学生もいた。修士課程修了の祝賀会には一緒に写真をと請われて撮影に加わったことが思い出される。残念ながら彼とはそうした思い出が無かったと記憶するが同じ宿舎でそうした出会いがあったこと、しかも彼がそのことを鮮明に記憶してしてくれたことは感激である。小さな出会いが思い出を作り、時には人生の起爆剤や、将来への分岐点さらには思案点となることをあらためて重視したい。たかがバナナを少し与えたと言う小さなことでも、感受性に富む若い彼にとっては忘れがたい人生のヒトコマに違いない。チェンマイにいて良かった。彼に出会えて良かったと言う素直な気持ちを新たにし、更なる貢献ができれば幸いである。まさに滞在の機会を与えて頂いたチェンマイ大学に感謝の気持ちで一杯である。経済的支援を得て自分の好きなことが出来る環境に素直に感謝すべきである、これほどありがたいことはない、文句を言うなどもつたいない。もってのほかだ」とは大学院時代の恩師の言葉である。



図1 研究プロジェクトについて討議中



図2 市内のレストランで昼食の参加者



図3 開会式挨拶後の集合写真撮影



図4 ラオスからの研究者の講演発表